学長文学歴史サロン'２４（４）　　兵庫県阪神シニアカレッジ

阪神間の師直の足跡

2024.12.08

― 吉良上野介と高師直 ―

田辺眞人

は じ め に

１．　元禄赤穂事件と『碁盤太平記』『仮名手本忠臣蔵』

（１）事件の原因

（２）関係の人物：浅野内匠頭長矩・大石内蔵助・吉良上野介義央
　　塩冶判官　　・大星由良之助・高 師直

２．　阪神地域の高 師直

南北朝時代(1336 ～ 92)の争乱：各地に城砦。「　　」は瀬戸内東端の要港

1340頃　後醍醐天皇・新田義貞死亡　⇒南朝劣勢⇒　1348四条畷の戦い（楠木正行敗死

1350頃　観応の擾乱(1350 ～ 52 北朝方分裂＝足利尊氏・高師直　×　足利直義・

天下三分　＝　統一遅れる　　⇒ 1339 三代、義満による南北朝合一

文献　『太平記』松岡城周章ノ事

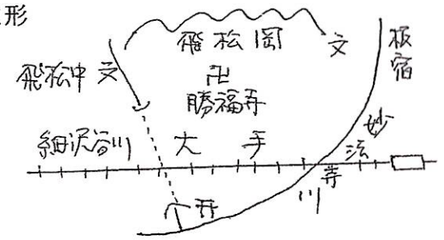
史実　観応 2(1352)2･17打出御影の戦い

　　敗走した尊氏、松岡城で自刃寸前

地名　大手町・竹の花・馬場

武神　証誠神社（五十猛命。権現さん）

地形



東灘区の御影城

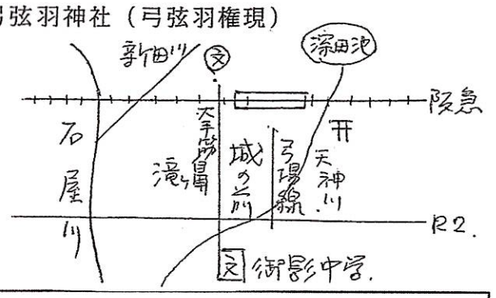
御影村城観応中平野氏拠焉『摂津志』

御影の平等山中勝寺の縁起伝説

（土豪の平野忠勝の死後平野山忠勝寺

大手筋・城の前・滝ガ鼻・弓場（線）

弓弦羽神社（弓弦羽権現）



同廿六日ニ、將軍已ニ御合體ニテ上洛シ給ヘバ、執事兄弟モ、同遁世者ニ打紛テ、無常ノ岐ニ策ヲウツ。折節春雨シメヤカニ降テ、數萬ノ敵此彼ニ聲タル中ヲ打通レバ、ソレヨト人ニ被ニ見知ニジト、蓮ノ葉笠ヲ打傾ケ、袖ニテ顔ヲ引隠セ共、中々紛レヌ天ガ下、身ノセバキ程コソ哀ナレ。

執事兄弟武庫川ヲ打渡テ、小堤ノ上ヲ過ケル時、三浦八郎左衛門ガ中間二人走寄テ、「此ナル遁世者ノ、顔ヲ藏スハ何者ゾ。其笠ヌゲ。」トテ、執事ノ著ラレタル蓮葉笠ヲ引切テ捨ルニ、ホウカブリハヅレテ片顔ノ少シ見ヘタルヲ、三浦八郎左衛門、「哀敵ヤ、所レ願ノ幸哉。」ト悦テ、長刀ノ柄ヲ取延テ、筒中ヲ切テ落サント、右ノ肩崎ヨリ左ノ小脇マデ、鋒サガリニ切付ラレテ、アット云處ヲ、重テ二打ウツ、打レテ馬ヨリドウド落ケレバ、三浦馬ヨリ飛デ下リ、頸ヲ掻落シテ、長刀ノ鋒ニ貫テ差上タリ。

小清水ノ軍ニ打負テ、引退兵二萬餘騎、四方四町ニ足ヌ松岡ノ城ヘ、我モ〳〵トコミ入ケル程ニ、沓ノ子ヲ打タルガ如ニテ、少モハタラクベキ樣モ無リケリ。角テハ叶マジ、宗トノ人々ヨリ外ハ内ヘ不レ可レ入トテ、人ノ郎從若黨タル者ハ、皆ソトヘ追出シテ、四方ノ闕下シタレバ、元來落心地ノ付タル者共、是ニ事名付テ、「無二憑甲斐ニ執事ノ有樣哉。サテハ誰ガ爲ニカ討死ヲモスベキ。」ト、面々ニツブヤキテ打連〳〵落行。今ハ定テ路々ニ敵有テ、落得ジト思フ人ハ、或ハ釣スル海人ニ紛レテ、破レタル簑ヲ身ニ纏ヒ、福良ノ渡・淡路ノ迫門ヲ、船ニテ落ル人モアリ。或ハ草苅ヲノコニ簀ツ、、竹ノ笹ヲ肩ニ懸、須磨ノ上野・生田ノ奥ヘ、跳ニテ逃ル人モアリ。運ノ傾ク僻ナレ共、臆病神ノ著タル人程見苦キ者ハナシ。夜已ニ深ケレバ、サシモセキ合ツル城中サビ返テ、更ニ人アリトモ見ヘザリケリ。

將軍執事兄弟ヲ召近付テ宣ケルハ、「無二云甲斐ニ者共ガ、只一軍ニ負タレバトテ、落行事コソ不思議ナレ。サリトモ樊噲命鶴・高橋・海老名六郎ハ、ヨモ落去ジナ。」ト問給ヘバ、「ソレモ早落テ候。」「長井治部少輔・佐竹加賀ハ早落ツルカ。」「イヤソレモ皆落テ候。」

「イザヤ最後ノ酒盛シテ、自害ノ思ヒザシセン。」トテ、大ナル酒樽ニ酒ヲ湛ヘ、銚子ニ盃取副テ、家城源十郎師政酌ヲトル。

斯ル處ニ、東ノ木戸ヲ荒ラカニ敲ク人アリ。諸人驚テ、「誰ソ。」ト問ヘバ、夜部落タリト沙汰セシ樊噲命鶴丸ガ聲ニテ、「御合體ニ成テ、合戰ハ有マジキニテ候ゾ。楚忽ニ御自害候ナ。」トゾ呼ハリケル。コハソモ何トアル事ゾヤトテ急ギ木戸ヲ開キタレバ、命鶴將軍ノ御前ニ參テ、

命鶴委細ニ申ケレバ、將軍モ執事兄弟モ、サテハ子細非ジトテ、其夜ノ自害ハ留リテゲリ。

＜ポートピアホテル 特別ランチ付講演会＞

田辺眞人の知っとこ！レクチャー＆ランチ
『桃太郎の文化～３月３日に向かって～』

日時　2025年 2月15日(土) 10:30～13:30 【受付10:00～】
講師　田辺 眞人(県立兵庫津ミュージアム名誉館長)
場所　神戸ポートピアホテル(本館地下1階「布引の間」)
料金　一般 7,500円（税込）
予約　TEL 078-303-5212(直通)
ホテル公式HPからお申込みはこちら
サロン・ド・ポートピア事務局 10:00～17:00/日曜日・祝日は定休日

「田辺眞人の放課後チャット」は、神戸の月刊タウン紙『Dジャーナル』に連載中。Dジャーナルは無料で、三宮ハローステーション神戸や神戸駅地下デュオ神戸の案内所で手に入ります。

田辺眞人の放課後チャット（37）

神戸深江生活文化史料館のこと

昭和五五年夏に深江財産区が村史編纂のための資料提供を呼びかけると、町内の深山健二氏が自宅を建て替えるので、一切を寄贈すると申し出られた。江戸時代から続く医家の豪邸を財産区の太田垣正雄会長と訪れた私は、豊富な生活文化財の数々に感嘆した。数箱の資料を受け取ると考えておられた財産区に、散逸させると、二度と入手できない価値を伝え、可能な限り受納してほしいと説得した。

財産区は集合住宅の一戸を借りて、自治会や消防団役員の協力で、埃だらけの品々をそこに搬入した。教え子で民俗調査を続けていた渡部永子さんが懸命に整美すると、古物は見違えるような民具コレクションに変貌した。その結果、神社境内に倉庫を建てる予定だった財産区は、それを二階建てにし、上の階を収蔵品の展示・保存に当てようと決められた。

こうして、大日霊女神社境内の深江会館に隣接する別館として、神戸深江会館生活文化資料室が昭和五六年二月二一日にできた。打出焼などの陶磁器や祝い膳などの漆器、甲冑や軍服、農具や医具、古いカメラや玩具、大正期の新聞などを展示したケースの下の地袋を収蔵庫として利用。土・日の開室を学生アルバイトが担い、団体予約があれば平日も開室した。手作りのミニ博物館は多くのメディアに取り上げられ、一年間で千人以上の市民が見学に訪れた。近隣の小学校からは郷土学習のために四年生全員が見学してくれた。私は地元名士の他、サンテレビの門前喜康氏や共同印刷の井浪昭幸社長などを幹事として、史料室を支援する「友の会」を組織してもらい、芦高の小嶋悦郎先生に会長を頼んだ。「友の会」は最盛期に四五〇名の会員を持ち、「魚を担いで魚屋道を歩く会」や「源平八〇〇年記念屋島ツアー」などを実現して、市民を歴史に親しませた。

▲史料館。財産区管理会委員が理事になり運営。

二年後に財産区では施設拡張を決定し、五倍の床面積、鉄筋三階建ての神戸深江生活文化史料館が昭和五八年に開館した。三階のホールでは、小学館との共催で「まんが日本の歴史原画展」やタカラジェンヌ「上原まり琵琶演奏会」「世界と日本の文化を語る会」などが好評を博した。

盛況だった史料館事業は、数年後には問題も生み出した。校外で盛んに活動する私に、高校教師の問題児だという管理職が現れ、ある同僚は二足の草鞋は一足脱いだらと言った。一方、史料館理事の中に、有名になった史料館の館長には、高校教員の私より大学の先生を招くべきだと考える人が現れた。この高校内の軋轢と史料館内の空気で、私は人生をリセットしようと、日本の仕事を全て辞め、ニュージーランドに移住することになる。ただ、それは五年余り後のことで、今しばらくの間、私は御影高校で歴史の研究と教育を続けた。

（県立兵庫津ミュージアム名誉館長）